《史料解説》

ウェレイウス・パテルクルス『歴史』の史料的価値をめぐって

岡本　幹生

1. 史料の状況

帝政成立期は、ローマ帝国にとって大きな転換点であり、研究者たちに長年注目されてきた時期の一つである。王政を廃した過去をもつローマ人は、王の再来を避けるため、一人の人間が権力を掌握するような支配体制を嫌う慣習があり、共和政体制を曲がり形にも維持してきた。しかし、前 1 世紀の度重なる内乱を大きな契機として、共和政体制は大きく変質していった。ユリウス・カエサル（前 100 頃-前 44）、グナエウス・ポンペイウス（前 106-前 48）、マルクス・リキニウス・クラッスス（前 112 頃-前 53）の三頭体制、続くオクタウィアヌス（前 63-後 14）、マルクス・アントニウス（前 82 頃-前 30）、レピドゥス（?-前 13）の三人委員期を経て、最終的に、約 1 世紀に亘る内乱をオクタウィアヌスが鎮圧した。その功績を称えられたオクタウィアヌスは、元老院からアウグストゥスの尊称を賜り、個人が突出した権力をもつ支配体制（いわゆる帝政）を確立していった。このようないわゆる帝政成立についての経緯は、つとに有名である。また、帝政成立に関する研究については、テオドール・モムゼンの研究[1]を嚆矢として、現在までに夥しい研究の蓄積が存在する[2]。

しかしながら、アウグストゥス帝期の同時代史料は意外にも残っていない。アウグストゥス帝期について触れている、タキトゥスの『年代記』[3]やスエトニウスの『ローマ皇帝伝』、カッシウス・ディオの『ローマ史』などは、いずれも後代の産物である。ウェルギリウス（『アエネーイス』や『農耕詩』など）やオウィディウス（『祭暦』など）、ホラティウス（『風刺詩』や『カルミナ』など）らの詩編や、『神君アウグストゥスの業績録』に代表される碑文史料を除けば、ウェレイウス・パテルクルスの『歴史』[4]は、残存する唯一の同時代史料といえる[5]。

---

[1] Mommsen, T., *Römisches Staatsrecht*, 3Bde., Leipzig: S. Hirzel, 1871-1888.

[2] 帝政成立に関する先行研究は、以下に纏められている。南川高志『ローマ皇帝とその時代——元首政期ローマ帝国政治史の研究——』創文社、1995 年、4-18 頁；丸亀裕司『公職選挙にみるローマ帝政の成立』山川出版社、2017 年、11-18 頁；丸亀裕司「ローマ共和政の本質とアウグストゥス」金澤周作監修『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房、2020 年、24-25 頁。

[3] ただし、タキトゥスはアウグストゥスの死から主な記述を開始しているため、アウグストゥスの死の前後以外については、あまり触れられていない。cf. Tac., *Ann*. 1.1.
また、本稿では、*Oxford Classical Dictionary* に従い、以下のような略号を用いる。タキトゥス『年代記』: Tac., *Ann*.；ウェレイウス・パテルクルス『歴史』: Vell.Pat.

[4] 本書に関するテキストは以下を参照することができる。Shipley, F. W. (ed.), *Compendium of Roman History/ Res Gestae Divi Augusti*, London: William Heinemann, 1924; Hellegouarc'h, J., (éd.), *Histoire romaine*, Paris: Les Belles lettres,1982; Elefante, M. (ed.), *ad M. Vinicium consulem libri duo*, Hildesheim: G. Olms, 1997; ウェレイユス・パテルクルス（西田卓生、高橋宏幸訳）『ローマ世界の歴史』京都大学学術出版会、2012 年。

[5] Cowan, Eleanor, “Introduction”, in Eleanor Cowan (ed.), *Velleius Paterculus: Making History*, Swansea: Classical

それにもかかわらず、長い間、ウェレイウスの『歴史』はしばしば二級史料扱いをされ、殆ど研究者に注意を払われてこなかった[6]。『歴史』はお情け程度に参照される、もしくは全く参照されないというのが通例となっていた。というのも、『歴史』にはアウグストゥスやティベリウス帝、ときの執政官マルクス・ウィニキウス、さらにはティベリウス帝の下で近衛長官をしていたセイヤヌスへの称賛と見られる文が散見されるからである。そして、『歴史』は彼らを喜ばせるためのものであり、ローマ皇帝のプロパガンダを媒介するものであると批判されてきた[7]。また、『歴史』が簡潔に事績を叙述した略史であることも、二級史料扱いを受けてきた一因であろう。そのような中、A.J.ウッドマンが上梓した論文[8]と二冊のコメンタリーが大きな分水嶺となり、ウェレイウスの『歴史』が再評価される機運が生じた。それでもなお、従来のウェレイウスへの批判は、現在においても一定の影響力を保持しているように思われる。そこで、本稿は、ウェレイウスの『歴史』を概観し、今一度その批判とウッドマンによる再評価について確認する。そして、ウェレイウスを史料として用いることの展望を述べたい。

2. 構成

ウェレイウスの『歴史』というテキストは、エラスムス（1456 頃-1536）の友人であったベアトゥス・レナヌスが 1515 年にアルザス地方にあるムルバック修道院で発見した写本[9]に由来する。これをレナヌスが 1520 年に刊行したものを、今日、ウェレイウスのテキストとして用いている。その際に、レナヌスはこのウェレイウスのテキストに「執政官マルクス・ウィニキウスに（捧げる）ローマの歴史（*Historia Romana ad M. Vinicium consulem*）」というタイトルを附している[10]。ただし、ウェレイウスのテキストの損傷は激しく、後に述べるように、序文と第 1 巻の大部分が欠落している[11]。

本書は、後 30 年にときの執政官マルクス・ウィニキウスに献呈された。ウェレイウスとマルクス・ウィニキウスの間にある、はっきりと分かっている直接的なつながりは、両者ともにカンパニア地方出身であることと、マルクス・ウィニキウスの父プブリウス・ウィニキウスの下でウェレイウスが軍人としてのキャリアを始めた[12]ことくらいである[13]。その

Press of Wales, 2011, x.

[6] このような状況は以下で説明されている。Woodman, A. J., “Questions of Date, Genre and Style in Velleius: Some Literary Answers”, *Classical Quarterly*, 25-2(1975), 272-306, 289; Gowing, A. M., “The Imperial Republic of Velleius Paterculus”, in J. Marincola (ed.), *A Companion to Greek and Roman Historiography* Vol. II, Malden: Blackwell, 2007, 411-417, 411.

[7] Woodman 1975, 272-273; Gowing 2007, 411.

[8] Woodman 1975.

[9] おそらく 8 世紀に写本されたマニュスクリプト。Woodman 1977, 3.

[10] Woodman 1977, 95; Rich, J., “Velleius’ History: Genre and Purpose” in Cowan 2011, 73-92, 76-77.

[11] 以上の概略については以下を参照。Woodman 1977, 3-4, 95; Rich, J., “Velleius’ History: Genre and Purpose” in Cowan 2011, 73-92, 76-77; 高橋宏幸「訳者あとがき」ウェレイユス 2012 年、223-224 頁。

[12] Vell.Pat. 2.101.3.

[13] Sumner, G. V., “The Truth about Velleius Paterculus: Prolegomena”, *Harvard Studies in Classical Philology* 74(1970), 257-297, 264-265; Woodman 1975, 273; Rich 2011, 75.

ため、リッチが指摘しているように、本書における、後述するようなウェレイウス自身の家系についての記述は、同郷のマルクス・ウィニキウスとの関連性を強調する狙いがあったと思われる[14]。そのマルクス・ウィニキウスはティベリウス帝の孫娘ユリアと婚約させられるほどの人物であった[15]。元老院議員、特に新人がプリンケプスに称賛を送ることは往々にしてあり[16]、ウェレイウスがマルクス・ウィニキウスやティベリウス帝、さらにはその寵臣セイヤヌスを称賛的に描いても当時においては奇異なことではないだろう。

通例、著作の冒頭にある序文にはその著作の執筆経緯や意図が示されているものだが、既に述べたように、ウェレイウスが『歴史』を執筆するにあたって、どのような構想をもっていたのかが記されていたであろう序文は伝存していない。しかし、『歴史』の序文は欠落しているものの、その書かれていたと思われる序文には、簡潔さ旨とすることが記されていたと推測される。なぜなら、本書が簡潔な叙述を目的としていることを述べた箇所や、その旨を示唆する記述が随所で見られる[17]ためである[18]。さらに、ウェレイウスは後に「完全な著作（iustum opus/iusta uolumina）」を書き上げる構想があることについて『歴史』の中でたびたび言及・示唆しており[19]、本書を略史として構想していたことを窺わせる[20]。

『歴史』は 2 巻構成になっており、第 1 巻ではトロイア戦争でのトロイア陥落から（第三次）ポエニ戦争でのローマ軍の攻撃によってカルタゴが焦土と化すまで（前 146 年）を、第 2 巻ではポエニ戦争終結からマルクス・ウィニキウスが執政官になる前年（後 29 年）までを扱っている。これらの出来事はおおよそ年代順に記されているが、ウェレイウスが別の出来事や余談を挿入している箇所もよく見られる。その挿入箇所の典型ともいえるのが、ウェレイウスの家系や自身についての話である。

ウェレイウス自身は前 19 年頃に生まれたと推定されており、後 31 年以降消息が分かっていない人物である。南イタリアのカンパニア地方の有力家系出身で、もともと騎士身分の家系である[21]。ウェレイウスの記述によると、伯父のウェレイウス・カピトは元老院議員

---

[14] Rich 2011, 75.

[15] Levick, B.,“Velleius Paterculus as Senator: A Dream with Footnotes”, in Cowan 2011, 1-16, 7. cf. Tac., *Ann*. 6.15.1.

[16] Veyne, P., « Qu’était-ce qu’un Empereur Romain ? : Dieu parce qu’Empereur », *Diogène* 199(2002), 3-25, 11-12 ; Levick 2011, 11.

[17] Vell.Pat. 2.55.1; 2.86.1; 2.89.6; 2.99.4. 簡潔さとは、あくまでもナラティブのスピードであり、急いで本書を執筆したわけではないことをウッドマンは主張している。Woodman 1975, 278-280. cf. Vell.Pat. 1.16.1; 2.41.1; 2.108.2; 2.124.1.

[18] Woodman 1975, 285; Starr, R. J., “The Scope and Genre of Velleius’ History”, *Classical Quarterly* 31-1(1981), 162-174, 163; Rich 2011, 73. 他にも、序文にはときの執政官マルクス・ウィニキウスに本書を捧げる旨が書いてあったと推測される。Starr 1981, 162.

[19] Vell.Pat. 2.48.5; 2.96.3; 2.99.3; 2.103.4; 2.114.4; 2.119.1.

[20] ウェレイウスが「完全な著作」を書き上げる構想を本当にもっていたのかどうかについては議論がある。サムナーやリッチは、ウェレイウスがこのような構想を『歴史』を書き上げたときにもっていたとするが、ウッドマンはウェレイウスがこのような構想をもっていたのかについては不確かだとしている。Sumner, 1970, 283; Woodman 1975, 287-288; Rich 2011, 74.

[21] ウェレイウスの記述に登場する最も古い祖先は、カンパニア地方の指導者であったデキウス・マギウスであり(Vell.Pat. 2.16.2.)、その孫にあたり、ウェレイウスの曾祖父であるのがミナティウス・マギウスである。ミナティウスは、同盟市戦争（前 91-前 87）での忠義の褒賞としてローマ市民権を得て、彼の二人の息子は法務官に選出されたようである(Vell.Pat. 2.16.2-3.)。他にも、ウェレイウスの父方の祖父ガイウス・

身分であった[22]が、父ガイウス・ウェレイウスは騎士身分のままであり、騎兵隊長(praefectus equitm)であった。この騎兵隊長の職は、ウェレイウスが引き継ぎ、のちのティベリウス帝の下で従軍している[23]。ウェレイウスは騎兵隊長になる前には、若い騎士身分の者が就く軍団副官(tribunus militum angusticlavius)[24]という役職を経験している[25]。しかし、のちのティベリウス帝の下での軍功により、ウェレイウスは財務官に指名され、元老院議員身分となった[26]（後 9 年）。その後には、ウェレイウスは、アウグストゥスにより法務官へと指名され、ティベリウス帝によって本職に推薦され、就任している[27]（後 14 年）。それ以降のウェレイウスの足跡について判明していることは、後 30 年に、ときの執政官マルクス・ウィニキウスに本書を献呈したことくらいである。

そのため、ウェレイウスが『歴史』をいつから執筆しはじめたのかについては推測の域を出ない。『歴史』が執政官マルクス・ウィニキウスに献呈されていることやアウグストゥスの妻でありティベリウス帝の母であるリウィアの死（後 29 年）まで『歴史』に記述されている[28]ことから、一般的にはウィニキウスが執政官に任命されたであろう後 29 年に筆を執り、ウィニキウスが執政官に就任した、後 30 年までに筆を擱いたと推定されている。つまり、執筆開始から擱筆までの期間はほんの数カ月ということになる[29]。この通説に対しウッドマンは、ローマ皇帝が執政官就任の確約を与えても、当人がすぐに執政官に就任できるわけではないことやティベリウス帝の厚遇を得ていたウィニキウスが後 20 年代半ばに法務官職にあったと想定されることから、ウィニキウスの執政官就任を見越して、後 20 年代半ばに筆を執ったとし、ウェレイウスは十分な時間を掛けて『歴史』を書き上げたと反論している[30]。しかし、リッチは、ウェレイウスがウィニキウスの執政官就任年を基準に年代を数えている箇所が多々ある[31]ため、ウィニキウスの執政官就任の目途が立たないうちは執筆不可能であると主張し、再反論を見せ、通説が最も妥当としている[32]。

以上がウェレイウスの『歴史』の構成についての概観である。

ウェレイウスが、グナエウス・ポンペイウスが三度目の執政官のとき（前 52 年）に判事に選出されたことなどが記されている(Vell.Pat. 2.76.1.)。cf. Levick 2011, 2-3.

22 Vell.Pat. 2.69.5.

23 Vell.Pat. 2.104.3..

24 軍団副官には若い元老院議員身分の者が就くもの(tribunus militum laticlavius)も存在する。新保良明『古代ローマの帝国官僚と行政——小さな政府と都市——』ミネルヴァ書房、2016 年、56-57、60、63 頁。

25 Vell.Pat. 2.101.3.

26 Vell.Pat. 2.111.3.

27 Vell.Pat. 2.124.4. 法務官就任は最終的に公職選挙によって決まるが、当該期においてはアウグストゥスが法務官候補を指名し、ティベリウスがその候補者を元老院に提示していた。そのため、皇帝に指名・推薦された者は、当選が確実であり、他の候補者が当選するのは困難であったと考えられる。丸亀 2017、164-165 頁。

28 Vell.Pat. 2.130.3-4.

29 Starr 1981, 170-171. cf. Elefante 1997, 27-28.

30 Woodman 1975, 275-282.

31 Vell.Pat. 1.8.1; 1.8.4; 1.12.6-1.13.1; 2.7.5; 2.49.1; 2.65.2.

32 Rich 2011, 84-86.

3. ウェレイウス批判と再評価

本稿の冒頭で既に述べたように、ウェレイウスのテキストは、しばしば批判にさらされてきた。しかし、その一方で残存する唯一のアウグストゥス帝期のテキスト史料としての重みもあり、他の史料との整合性が取れる記述については利用されてきたのもまた事実である。

ウェレイウスに対する批判は、ローマ史研究、特に帝政初期の研究に関して絶大な影響力をもっていた、ロナルド・サイムによるウェレイウス批判が大きく影響していると思われる。サイムはウェレイウスを「我々を惑わせる、虚言癖のある(Mendacious as well as misleading)」[33]、「一貫性に欠ける(incoherent)」[34]、「欺瞞に満ちた(fraudulent)」[35]、「媚び諂う(obsequious)」[36]、「口達者で破廉恥な(voluble and unscrupulous)」[37]、「追従と虚言を不快にも織り交ぜた(an uneasy amalgam of adulation and mendacity)」[38]、「追従的で不正直な(adulatory and dishonest)」[39]人物と評し、ウェレイウスの史料の信憑性について疑義を呈し、強烈に批判している[40]。事実、サイムは主著『ローマ革命（*The Roman Revolution*）』のインデックスに「ウェレイウスの不正直さ（the dishonesty of his history）」という項目をわざわざ設けたほどである[41]。このようなサイムのウェレイウスへの姿勢に対して反論を行ったのが、ウッドマンである。

サイムがウェレイウスを批判してきた点は大きく二つである。その一つは、史料価値が高いとされるタキトゥスが、ティベリウス帝やその寵臣セイヤヌスを批判的に描いているのに対し、ウェレイウスが彼らを称賛的に描いている[42]点にある。サイムによると、ウェレイウスが過度に彼らの事績を評価しているというわけである[43]。これに対し、ウッドマンは、サイムがそのように指摘する箇所（Vell.Pat. 2.126-128.）を他の史料（タキトゥス『年代記』やスエトニウス『ローマ皇帝伝』、カッシウス・ディオ『ローマ史』）と比較検討した結果、ウェレイウスは歴史的に正しい認識をしており、糾弾するほどではないとし、サイムの指摘は妥当ではないと反論している[44]。

---

[33] Syme, R., “M. Vinicius (cos.19 B.C.)”, *Classical Quarterly* 27-3/4(1933), 142-148, 147 n.3.
[34] Id, “Lentulus and the Origin of Moesia”, *Journal of Roman Studies* 24(1934), 113-137, 121.
[35] Id, *The Roman Revolution*, Oxford: Clarendon Press, 1939, 393 n.1. cf.ロナルド・サイム（逸身喜一郎他訳）『ローマ革命——共和政の崩壊とアウグストゥスの新体制——（下）』岩波書店、2013 年、150 頁注（3）。そこには「欺瞞に満ちたウェッレイユスを無邪気に信じることで、そしておそらくはディオーンの歴史叙述の実情に対する無知から、この時期（ティベリウスの隠遁期）の歴史についてかくもずさんな所見が蔓延したのである」とある。なお、引用箇所の（）内は引用者が補足。
[36] Id, “Seianus on the Aventine”, *Hermes* 84(1956), 257-266, 262.
[37] Id, *Tacitus*, Oxford: Clarendon Press, 1958, 367.
[38] Id, “Livy and Augustus”, *Harvard Studies in Classical Philology* 64(1959), 27-87, 69.
[39] Id, *Ten Studies in Tacitus*, Oxford: Clarendon Press, 1970, 47.
[40] 特に以下ではウェレイウスに対する強烈な批判が見られる。Syme 1939, 488-489.
[41] Ibid, 566.
[42] ティベリウス帝の称賛的な描写について Vell.Pat. 2.126. セイヤヌスの称賛的な描写について Vell.Pat. 2.127-128.
[43] Syme 1958, 368, 759 n.2.
[44] Woodman 1975, 290-303.

また、サイムがウェレイウスを批判するもう一つは、ウェレイウスが意図的に事実を歪曲している、とした点である。その箇所とは、第 2 巻第 106 章第 2 節[45]と第 2 巻第 112 章第 7 節[46]である。サイムは前者をティベリウス帝がエルベ河を初めて渡ったと読み[47]、後者をアグリッパ・ポストゥムスがアウグストゥス治世終焉前に死んだと読んだ[48]。これに対して、ウッドマンは以下のように反論している。前者は、この地で軍隊と艦隊が初めて合流に成功したことをウェレイウスが称賛しており、後者は、アグリッパ・ポストゥムスが死んだのではなく、彼が置かれた最後の状態（*exitus*）、つまり追放のことを指している。そのため、ウェレイウスは意図的に事実を歪曲しているわけではない[49]、とウッドマンは主張した。

以上のように、ウッドマンはサイムに対する反論を行い、ウェレイウスの史料としての再評価を図った。ウッドマンの論文及びコメンタリーを皮切りに、ウェレイウスに関する論文や著作が飛躍的に増加したことを考えれば、ウッドマンによるサイムへの反論は功を奏したといえるだろう。

4. 展望

上述のようなウッドマンによるウェレイウスの再評価は、近年の帝政成立に関する研究に大きく寄与するところがあるように思われる。ポール・ツァンカーの著作[50]に加えて、ポール・ヴェーヌが論文において、「ローマ皇帝」に対する認識や受容といった観点からの帝政成立の考察を示唆した[51]ことは一つの画期といえるかもしれない。現に、このような視点から研究を行ったクーリーは、ウェレイウスの『歴史』を検討する主要な史料の 1 つとして用いており[52]、今後も認識や受容といった観点から帝政成立を検討する際には主要な史料として扱うことが期待される。最後に、ウェレイウスの史料としての特色を述べ、本稿を締め括りたい。

ウェレイウスはタキトゥスと対照的に論じられることがある。それは、それぞれ「太鼓持ち」と「皮肉屋」として、である。しかし、むしろこの二者の間での重要な違いは、前 1

---

[45] Fracti Langobardi, gens etiam Germana feritate ferocior; denique, quod numquam antea spe conceptum, nedum opere temptatum erat, ad quadringentesimum miliarium a Rheno usque ad flumen Albim, qui Semnonum Hermundurorumque fines praeterfluit, Romanus cum signis perductus exercitus.

[46] Hoc fere tempore, Agrippa, qui eodem die quo Tiberius adoptatus ab auo suo naturali erat, et iam ante biennium, qualis esset, apparere coeperat, mira prauitate animi atque ingenii in praecipitia conuersus, patris atque eiusdem aui sui animum alienauit sibi, moxque, crescentibus in dies uitiis, dignum furore suo habuit exitum.

[47] Syme 1933, 147 n.3. ウェルズもこの見解に従っている。Wells, C. M., *The German Policy of Augustus: An Examination of the Archaeological Evidence*, Oxford: Clarendon Press, 1972, 159, 218-219.

[48] Syme 1958, 367. アレンもこの見解に従っている。Allen, W., “The Death of Agrippa Postumus”, *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* 78(1947), 131-139, 139.

[49] Woodman 1975, 304-305.

[50] Zanker, P. (translated by A. Shapiro), *The Power of Images in the Age of Augustus* , Ann Arbor : University of Michigan Press, 1988.

[51] Veyne 2002, 3.

[52] Cooley, A., “From the Augustan Principate to the Invention of the Age of Augustus”, *Journal of Roman Studies*, 109(2019), 1-17, 3-9.

世紀後半から後 1 世紀前半の時期（いわゆる帝政成立期）に継続性を見ているのか、断絶性を見ているのかであろう。すなわち、タキトゥスはこの時期が共和政の崩壊と「帝政」の幕開けであることを強調しているのに対し、ウェレイウスはこの時期にポエニ戦争以後失われた徳が回復されたとしながらも[53]、前の時代からのつながり（共和政の存続）を意識して叙述している[54]。後代に書かれた史料は、いずれもタキトゥスと概ね同様の視点をとっているため、同時代人のウェレイウスがこのような視点をもっていたことは特筆すべきと思われる。

また、連続性を意識していると思われる叙述は、共和政期から帝政期に限られない。事実、ウェレイウスはアシアやギリシアの歴史から叙述をはじめ[55]、ローマの歴史の叙述に至っており、『歴史』は普遍史としての性格を持ち合わせている[56]。ウェレイウスは、ローマという枠に収まらない連続性を捉えていると思われる。さらに、ウェレイウスはティベリウス帝を「良いローマ皇帝」の範として描写するが、そのティベリウス帝が保持しているとされた徳は、ティベリウス帝固有の徳というよりむしろそれ以前の「偉大な人物」たちが保持していた徳を総和したものとみられる[57]。これもまた連続性を意図したものであろう。ゆえに、連続性はウェレイウスのテキストに通底した一つのテーマといえるだろう。『歴史』が簡潔であるからこそ、連続性を看取しやすいともいえよう。このようなウェレイウスのもっていた連続性という観点は、当時の認識や受容を考察する際、重要な要素となるであろう。

（京都大学大学院修士課程）

---

[53] Vell.Pat. 2.126.5. cf. Vell.Pat. 2.129.3. ポエニ戦争を皮切りに奢侈や悪徳への道にローマが突き進んだことについては以下。Vell.Pat. 2.1.1.

[54] Gowing 2007, 411; Cowan 2011, x-xi. cf. Gowing, A. M., *Empire and Memory: The Representation of the Roman Republic in Imperial Culture*, Cambridge: Cambridge University Press, 2005, 34-48.

[55] Vell.Pat.1.6.1-2. この箇所においてもアッシリアからメディアへのアシアの帝国の移行について描写されている。

[56] Woodman 1975, 284; Rich 2011, 77-79.

[57] Gowing 2007, 412-417. ここで主に検討対象とされている「偉大な人物」は、スキピオ・アエミリアヌスやグナエウス・ポンペイウス、小カトーである。また、対照的に、『歴史』に見られるウェレイウスによるネガティヴなポートレート（アンニウス・ミロやプブリウス・クロディウス、レピドゥス、セクストゥス・ポンペイウス）について検討した研究もある。Cogitore, I., « Les Portraits chez Velléius Paterculus », *Latomous* 68(2009), 51-72, 51-55.